Global and Innovation Gateway for All

GIGA 通信

－児童生徒１人１台端末の日常的な活用に向けて－

発行元
佐 野 市 教 育 セ ン タ ー
佐野市上羽田町 1134 番地１
電話　20－3108
　　20－3048(相談専用)

大寒も過ぎ、暦の上では、まもなく立春を迎えます。今年は例年以上に寒さが厳しく、また新型コロナ感染予防対策もあり「春、なおまだ遠し」といったところかと思います。

先日、今年度最後の教育センター調査研究委員会がありました。所報でもお伝えしましたが、令和３年度は「学習指導」「特別支援教育」２つの委員会に 11 名の先生にご協力いただき、テーマに沿って研究を進めていただきました。３月上旬には「研究紀要」にて成果の報告ができると思います。お忙しい中での研究の推進に対して委員の先生方には改めて感謝申し上げます。

さて、今回からの GIGA 通信では、学習指導調査研究委員の先生方の１人１台端末の活用実践について紹介させていただきます。

今回は、植野小学校の先生の取り組みです。所属長である校長先生と一緒にロイロノートを利用した４年生算数の授業を参観させていただきました。内容は複合図形の求積で、児童の多様な考えから合理的な求積方法を児童が見つけ出す内容です。全ての児童が生き生きと活動に取り組み、「児童主体の学び」を感じる素晴らしい授業でした。

１時間の授業の中に「主体的な学びへに向けた端末活用」のポイントを数多く確認できました。

その中でも特に先生方にお知らせしたいと思った事を以下に紹介します。

ポイント１：端末の利用は指示があってから（利用の約束とブロック機能）

授業開始時に「端末は指示があるまで開かないでください。」と指示がありました。活動内容が伝えられ、端末利用の指示と同時に「待ってました。」とばかりに児童は作業に取り組みます。誰一人として作業に取り組めない児童はいません。何を目的とし、何を行うのかがしっかりと伝わっていました。

どのような授業においても、児童生徒が意欲を持って取り組めるような「課題の設定」が大切です。しかし、設定した課題がどんなにすばらしくても聞き逃しがあってはせっかくの課題も生きてきません。

さらに１人１台端末を利用する授業においては、机の上にある端末に気をとられ、教師の指示が届かず、活動開始時に作業に取り組めないといった様子を見ることがあります。主体的な学びには、まずは「教師の指示を聞く姿勢」が大切であり、本時の授業からは「聞く姿勢」の育ちを児童に感じました。また、端末を利用した活動が一段落し、考えの共有を図る際に、時間を指定し、時間が来たら画面を「ブロック」し、作業をストップさせ、次の指示を伝える場面がありました。

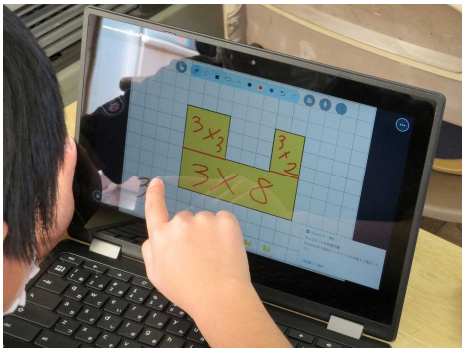
授業をされた先生からは「ロイロノートをよく使いますが、作業を落ち着かせるためによく「ブロック機能」を使います。「ブロック機能」を効果的に使うことは「聞く姿勢」を育てる上で大切であると思います。時間を決めて、その上でブロックするとなお有効かもしれません。」という話を聞くことができました。

ポイント２：児童の考えを認め、紹介する。（提出箱をチェック、そして実況中継）

今回参観した授業で、児童の活動が始まるとすぐ、先生は机間指導を始めました。手にはキーボードを外した指導者用端末(サーフェス)を持って

います。先生は歩きながら、指導者用端末の画面をチェックします。画面には提出箱に提出された児童の回答シートが映し出されています。シートを確認し「〇〇さん、もう提出できてますね。この考えは、〇〇の方法に近い考え方ですね。」「〇〇さんとは違う〇〇の方法を考えているのが〇〇さんですね。この考え方、先生はとても好きですね。」といった感じの実況が始まりました。

一方、児童は、エクセルで作られた複合図形の問題に求積についての自らの考えをフリーハンドで書き込み、次から次へと回答シートを提出箱に送ります。５分程度で２～３枚の回答シートを作成し送る児童がいれば、一枚のシートの作成に時間をかけ、自らの思考過程をしっかり記している児童もいます。思い思いの作業に全ての児童が意欲的に取り組む様子を見ることができました。まさしく「児童主体の学び」です。



児童が生き生きと意欲的に学習に取り組むことが「児童主体の学び」の第一歩です。児童の「学びたい」という気持ちを高めるために、「児童の考えを認め励ます」ことはとても大切です。髙尾先生が担任するこの学級では、授業の中で、「児童の考えを認め励ます場」が絶えず用意されていると感じました。その「考えを確認する」方法の一つとして、指導者用端末とロイロノートの提出箱機能がうまく活用されていました。

電子黒板等に提出箱の中から児童のシートを映し出し、「考えの共有」や「まとめ」を行うような授業を見させていただくことはこれまでもありましたが、今回のような指導者用端末(タブレット）を持ち歩いて、提出箱で児童の作業(思考)過程を確認し、その様子を学級で共有する取り組みは、初めて見せていただきました。また、提出箱を確認すると思考につまずいている児童もわかります。そのような児童には机間指導で先生が直接声をかけることもできます。児童の「やる気」を高め、「学び」を深める素晴らしい取り組みであると思いました。

○今後に向けて

授業後、先生に授業の中での１人１台端末を含む ICT 活用についてお聞きしました。

「１人１台端末を含め機器をどう使おうかと考えることより、まずは使えるかなと思ったときにどんどん使っています。特に視覚に訴えたいと思ったときには、使います。いろんな使い方をしていると、その中にうまく使えたなと思うことがあるので、そんなときには同僚の先生方と使い方を共有するようにしています。児童が授業に楽しく参加することが何よりと考えています。」とのお話を聞くことができました。

主体的な学びに結びつけるために「どう使うか」で悩むのではなく「まずは、使ってみる」「使ってみたら良かった(主体的な学びにつながっていた)」という考え方の大切さを教えていただいた気がしました。今後の活用に向けて、参考にしていただけるのではないでしょうか。

（文責　教育センター所長）

※今回の授業とは別に、先生には調査研究委員として植野小学校での ICT 活用について紀要にまとめていただいています。他の活用についても参考にしていただければ幸いです。